

# 言語における語形と意味の接点

——親族名称を通じて行なった一試考——

池　　ヒ　　サ　　子

## I 前　　文

われわれの現実はどのように言語に反映するであろうかとの疑問の解決の手はじめとして、親族名称の場合を考えてみたいとの意図から、通時的立場において研究をすすめる。

1962年 Robert J. Smith の発表した Japanese Kinship Terminology: The History of Nomenclature<sup>(1)</sup>は、資料としたものが言語現象であるという本質を看過しているのではないかと思われるので、本研究においては、実際に用いられた様相で親族名称をとらえ、言語学的配慮のもとに処理考察するように努力する。本研究における親族とは、ある個人の血族、姻族にあたる人間を総称し、親族名称とはある親族成員のことを第三者に話す際にその人を名ざす用語である。<sup>(2)</sup>

## II 本　　文

### A 資　　料

#### 1. 収　　集

##### a 限　　定

きめられた調査対象となっている書物から、親族成員を名ざす用語を、漢語と思われるもの、和語と思われるもの、漢字で書かれたもの、かなで書かれたものすべてを、書物に書かれている形態そのままの状態に収集した。

##### b 調査対象

過去及び現在の日本の文学作品とし、一時代の文学を代表し、かつ親族名称が豊富にあらわれると思われる文学作品をえらんだ。江戸時代以前の文学作品については、岩波書店発行の日本古典文学大系を用い、現代については、河出書房新社発行の現代の文学及び現代の文学に含まれた作家の作品を文芸春秋からえらんで調査した。尚予備テストとして朝日新聞及び週刊誌も使用した。

調査対象書物の明細は次の通りである。

万葉集 1	高木市之助 五味智英 大野晋 校注	日本古典文学大系	第 4 卷、昭32
” 2	”	”	第 5 卷、昭34
” 3	”	”	第 6 卷、昭35
” 4	”	”	第 7 卷、昭37

古事記祝詞	倉野憲司 武田祐吉 校注	〃	第1巻、昭33
源氏物語 1	山岸徳平 校注	〃	第14巻、昭33
〃 2	〃	〃	第15巻、昭32
〃 3	〃	〃	第16巻、昭36
〃 4	〃	〃	第17巻、昭37
〃 5	〃	〃	第18巻、昭38
竹取物語 伊勢物語 大和物語	阪倉篤義 大津有一 阿部俊子 校注 築島 裕 今井源衛	〃	第9巻、昭32
方丈記 徒々草	西尾実 校注	〃	第30巻、昭32
宇治拾遺物語	渡辺綱也 西尾光一 校注	〃	第27巻、昭35
平家物語上	高木市之助 小沢正夫 渥美かをる 金田一春彦 校注	〃	第32巻、昭34
平家物語下		〃	第33巻、昭35
歌舞伎脚本集上	浦山政雄 松崎仁 校注	〃	第53巻、昭35
〃 下	〃	〃	第54巻、昭36
浄瑠璃集上	乙葉弘 校注	〃	第51巻、昭35
〃 下	〃	〃	第52巻、昭35
西鶴集上	野間光辰 校注	〃	第47巻、昭32
〃 下	〃	〃	第48巻、昭35
近松浄瑠璃集上	重友毅 校注	〃	第49巻、昭33
〃 下	守随憲治 大久保忠国 校注	〃	第50巻、昭34
松本清張集		現代の文学	第27巻、昭38
五味川純平集		〃	第33巻、昭33
川端康成集		〃	第8巻、昭38
文芸春秋	小林光紀 編	文芸春秋新社	昭38

## 2. 整 理

### a 時 代

文典文学の歴史の区分及び調査対象とした文学作品が、どの時代に属するかについては久松潜一著日本文学史<sup>(3)</sup>にもとずき下のようにした。

上古時代	万葉集・古事記
中古時代	源氏物語・大和物語・伊勢物語・竹取物語
中 世	平家物語・宇治拾遺物語・方丈記・徒々草

近 世 歌舞伎脚本集・近松浄瑠璃集・西鶴集・浄瑠璃集

b 調査対象とした書物が予想する読者層の水準

調査対象とした書物が予想する読者層の水準によって、その中にあらわれる親族用語に水準の差があるのではないか。もし水準の差があるとすれば、調査対象とした文学作品から収集した親族名称は、同じ立場で整理されてはならない。従って予備テストとして、新聞及び週刊誌<sup>(4)</sup>にあらわれる親族名称を収集比較したが、その結果、共時的には読者層の水準の差は考慮に入れなくともよいとの結論を得た。

c 場

親族名称が言語事実である以上、それが用いられる場は重要と思われるので、本研究では場を、ある親族名称が用いられる際の話し手、聞き手、話題の親族関係の面で把握し、収集した全資料は、次の6つの場に用いられていることがわかり、全親族名称を6つの場に分類した。

場Ⅰ 話し手、聞き手、話題はそれぞれ別々の親族に属する場合

場Ⅱ 話し手と話題とは同親族に属し、聞き手が属さない場合

場Ⅲ 聞き手と話題が同親族に属し、話し手は属さない場合

場Ⅳ 話し手、聞き手、話題が共に同一親族に属する場合

場Ⅴ 話し手と話題は同一人物であり、聞き手は話し手と同一親族に属する場合

場Ⅵ 話し手と話題は同一人物であり、聞き手は話し手の親族に属さない場合

d 文 脈

ことばが、文脈により意味を決定づけられるように、親族名称もその用いられる文脈によりどの親族成員をさすかが決定されなければならない。現代の文学作品に用いられる親族名称はわれわれの常識から或る程度想像もできるが、時代が古くなればなる程、親族名称もその用法も現代とは大きく異なっていることが考えられるので、文脈の十分な理解がなくては、ある親族名称が一体どの親族成員をさすかはわからない。文脈との関連において親族名称には同音異義語及び類義語がいくつかあることが知られた。例えば古事記に用いられた2つの「姨」<sup>をば</sup><sup>(5)</sup>は一つは現代での叔母、他は妹をさす親族名称である。

e 系 譜

場、文脈からしても尚、ある親族名称がどの親族成員をさすか不明の場合がある。例えば、平家物語に「伯父信太郎先生義憲……」<sup>(6)</sup>とあるが、文脈からでは義経の親族であること以外はどの親族成員を名ざすか不明であるが、系譜を参照すれば、信太三郎義憲は、彼の父の弟であると決定できる。同じく平家物語中の「姑」<sup>(7)</sup>は俊寛僧都の娘の親族成員であること以外ははっきりしない。というのは、その娘に関する系譜が、現在ではまだ不明確なため、「姑」はどの親族成員を名ざすかわからず、このような場合には資料として「姑」を扱うことができない。私が本研究の調査対象を文学作品に限ったのは、現在の段階で最も研究され信用し得る新しい調査対象を用いることが、そこにあらわれる親族名称がどの成員を名ざすかを決定する

際、一番信頼できるとの考えからであった。

#### f 頻度数

全収集資料のなかにあらわれる親族名称の各言彙は後の図に書いておいた。しかし、各名称の頻度数については、上古時代では万葉集、古事記、中古時代では源氏物語、中世では平家物語近世では浄瑠璃集、現代では、松本清張集、五味川純平集、川端康成集を調査して得た親族名称に限った。限られた調査対象の文学作品に用いられている親族名称の頻度数を調べることは一見無意味に思われる。しかし池稔の行なった共時的親族名称の研究<sup>(8)</sup>によれば、或る個人は自分の父親を、「ちち」と呼ぶとき、その人は母親を「はは」と呼び、また「おじさん」に対しては「おばさん」等のように必ず関連性や対立性をもつ親族名称で、自分の親族成員を呼ぶという。さらに共時的立場において収集した彼の資料を集積的に語彙として整理考察してみると、George Peter Murdock がいっている “two persons to constitute a social relationship”<sup>(9)</sup> においては、最高の頻度数をもった名称どうしは、必ず両極名称として互に対立している。従って、語彙として両極名称を扱い、そこにいくつかの類義語が見出されるとき、各名称の頻度数を知ることは、対立名称を知る重要なきめ手になる。この事実を書きことばに適用してみる。一文学作品内では、一個人の親族成員の多くが登上人物となるとは限らず、それらの人々が、親族名称で名ざされることは尚少ない。しかし、例えば、平家物語に「かの僧都は父山陰中納言、太宰大貳になって鎮西へ下られける時、2歳なりしを、継母にくんで、あからさまにいただくやうにして海水おとし入、ころさんとしけるを、しににけるまことの母、存生の時……」<sup>(10)</sup> の「父」「母」のように、一文学作品中の幾人かの登上人物のいろいろな親族成員がどんな名称で呼ばれ、それがどのような頻度で用いられているかを知ることが、親族名称を扱うに際して重要な問題であると考えた。

### 3 図

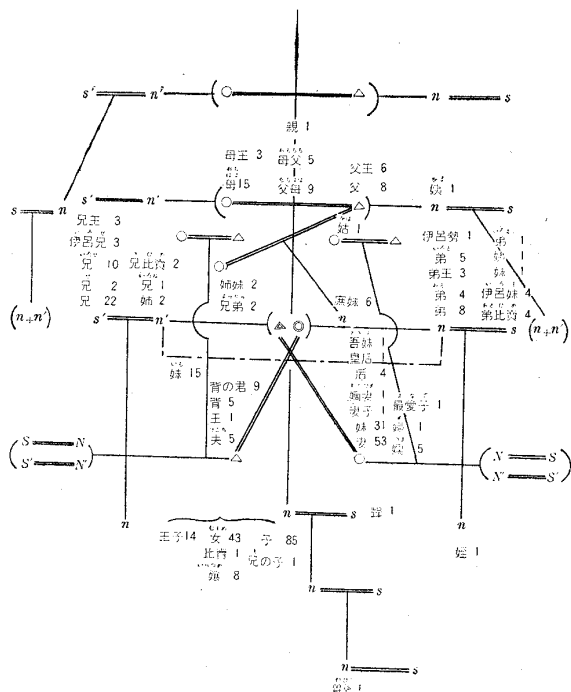
以上の手順により収集整理した資料を図にあらわして、次のように示すことができた。しかし、前述の場による資料分類の結果は、調査対象とした文学作品の種類によって、そこに用いられる親族名称は、場Ⅰ及び場Ⅱでよく使用されていて、6つの場すべての図を作成する程の名称は収集できなかった。従って図は、各時代にわたって場Ⅰ、場Ⅱ及び近世には、それに場Ⅲ、場Ⅳを加えたものである。

#### 凡例

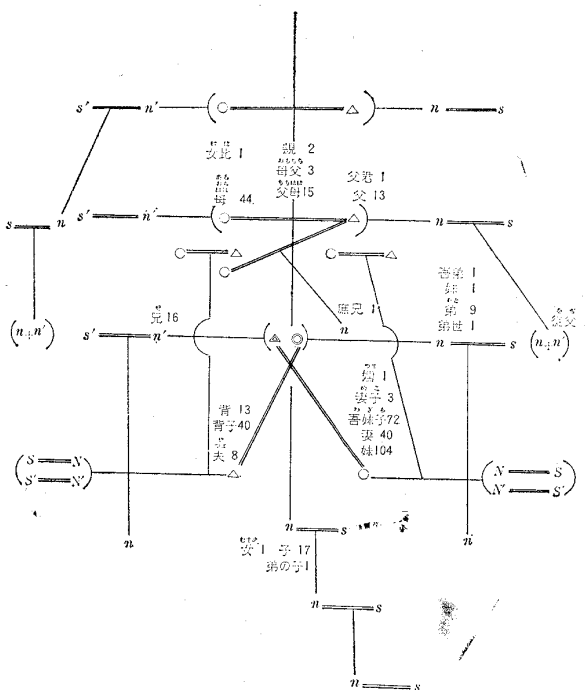
= 婚姻関係	— 兄弟姉妹関係	親子関係
△ 男	○ 女	◎ 本人
▲ 本人	<i>n</i> 直系親族の兄弟姉妹 offspring	及び <i>s</i> <i>n</i> の配偶者
S Nの配偶者	′ 年上を示す	N 姻族の兄弟姉妹

a 上古時代

場 I

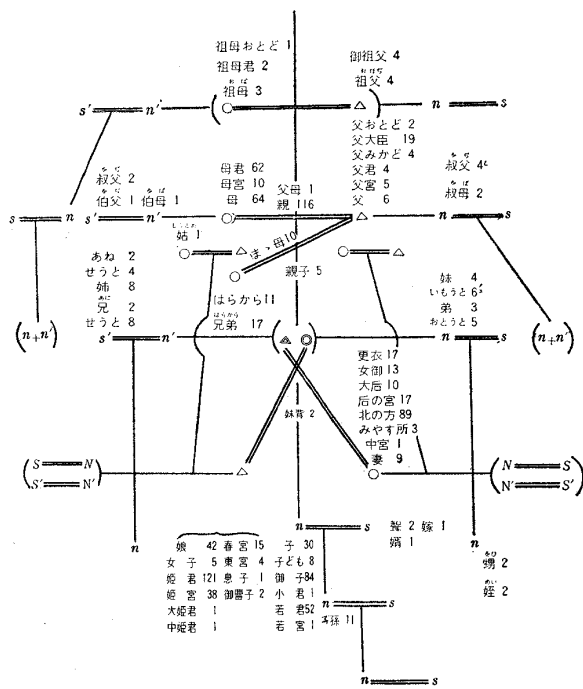


場 II

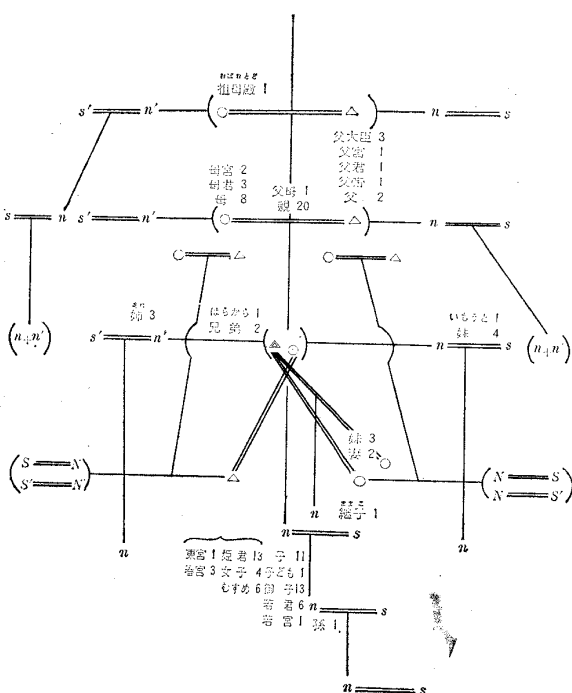


b 中古時代

場 I

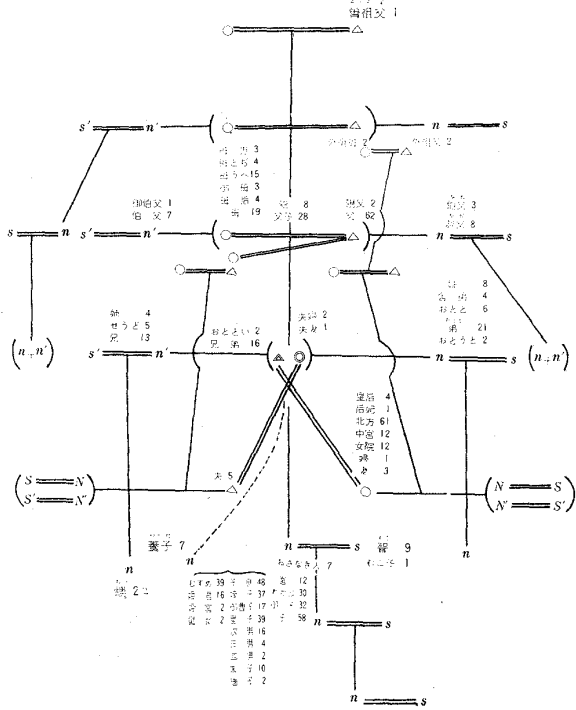


場 II

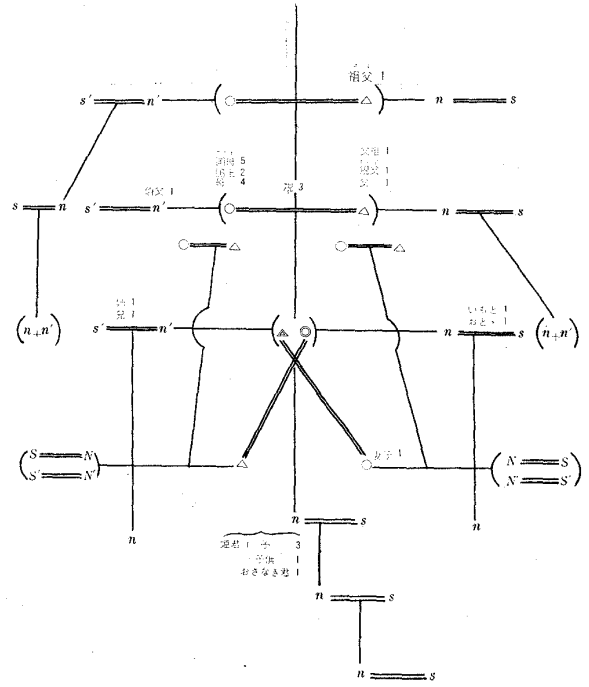


c 中 世

場 I

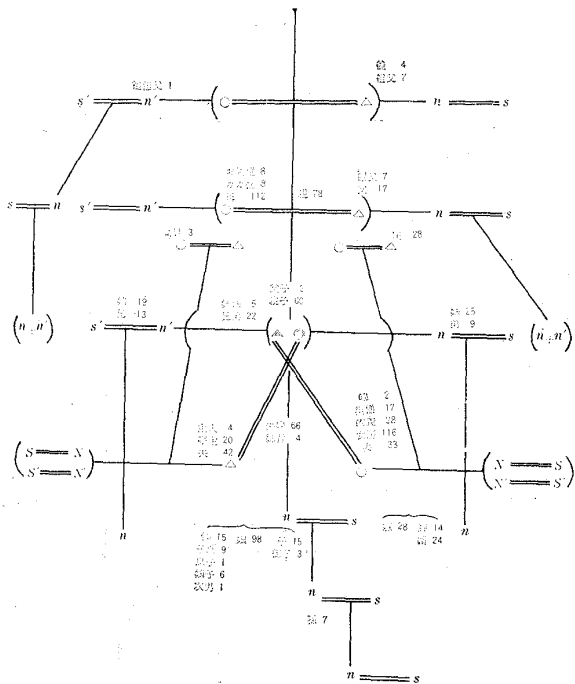


場 II

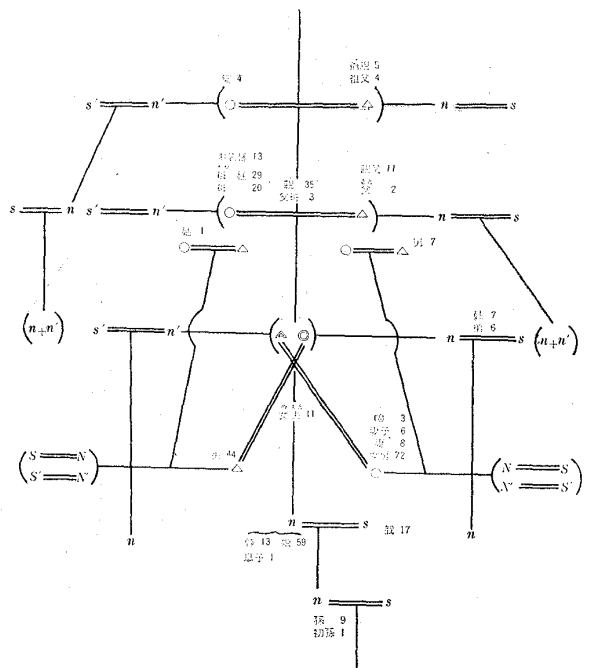


d 近 世

場 I

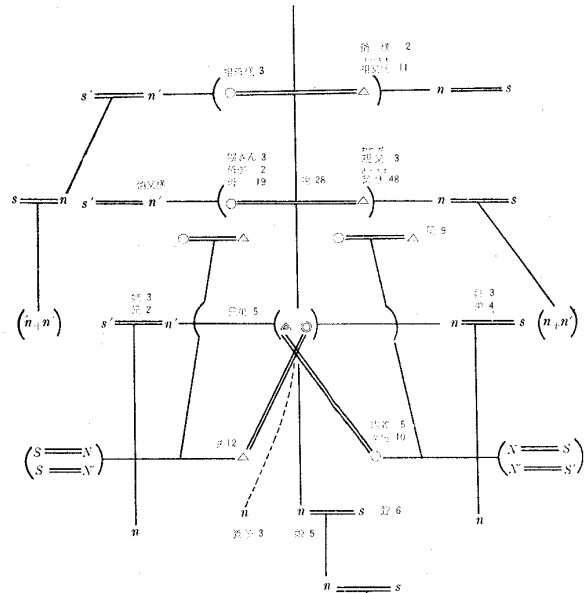
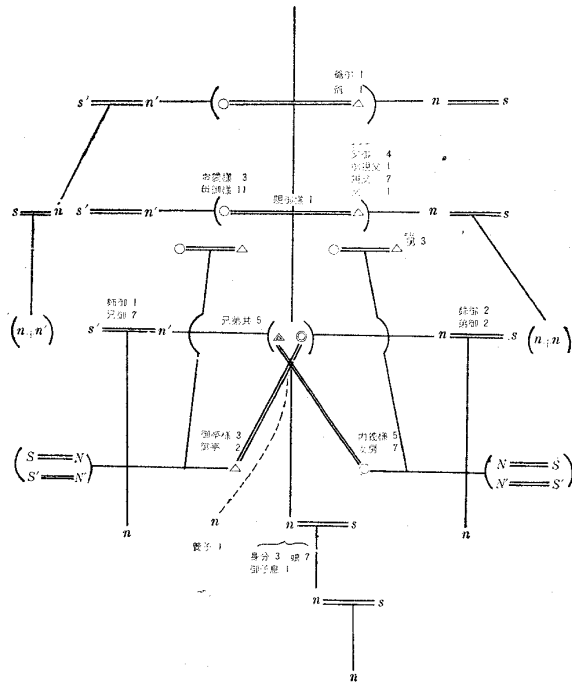


場 II



場 III

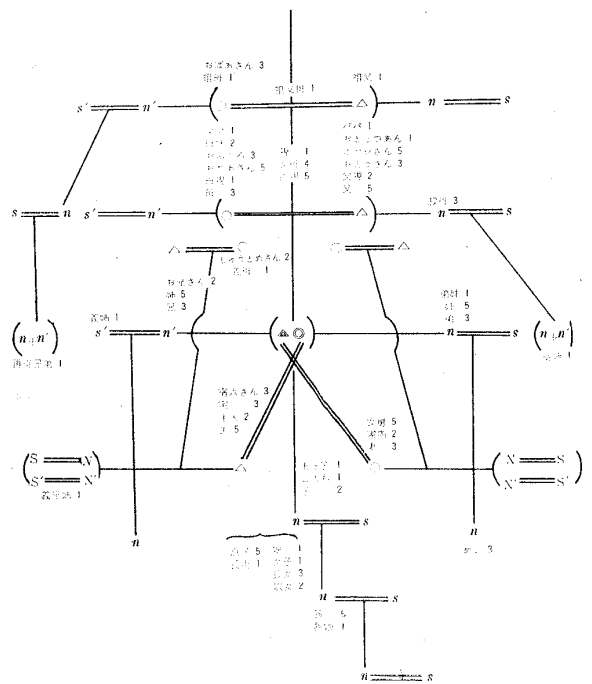
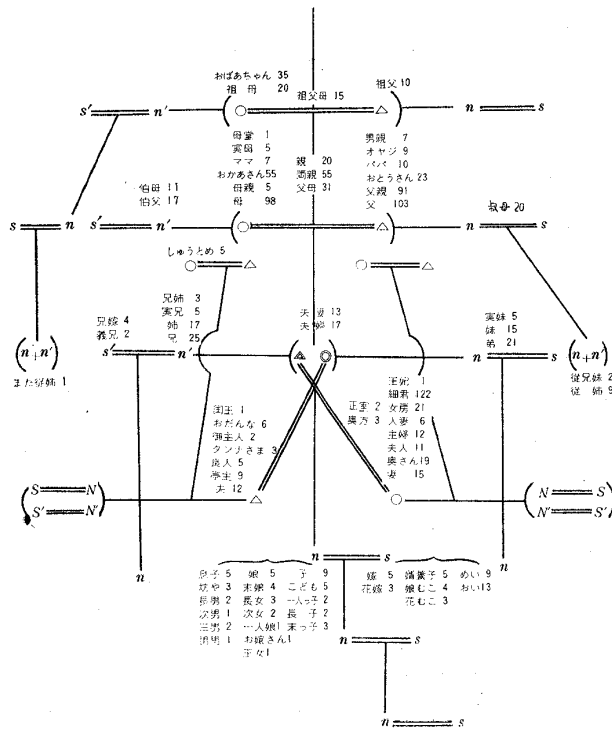
場 IV



e 現代

場 I

場 II



## B 考 察

作成された図を考察するに際しては、場による分類にしたがって同じ場に属する親族名称を歴史的に考察していくのであるが、場Ⅰ以外に属する親族名称は語彙数及び頻度数が少ないので、ごく限られた数の親族名称は考察に適さないと考え、場Ⅰにおける資料に関して考察を行った。また同一親族成員を名ざす名称がいくつかある場合には頻度の高低を考慮に入れ、主として、最も数多くあらわれた親族名称を扱った。話者の level を示す語、例えば、「母うへ」の「うへ」、「御母」の「御」など、また話題となっている親族成員の職業をあらわす語例えば「父おとど」の「おとど」「父王」の「王」などは、それらがもしなくても、特定の親族成員を名ざすので、親族名称に附属することばとして考えた。

あに、おとうと、あね、いもうと

次の表は兄弟姉妹をあらわす親族名称を時代毎に表にあらわし、歴史的に考察しやすいようにしたものである。

表 1

親族 成員 時代	男		女					
	あに	おとうと	あね	いもうと				
上 古	兄	22	弟	8	兄比売(えひめ) 2	弟比売(おとひめ) 4		
	兄(せ)	2	弟(おと)	4	兄(いろね)	1	伊呂妹(いろも) 4	
	兄(いろせ)	10	弟王(おとみこ)	3	姉	2	妹(いろも)	1
	伊呂兄(いろせ)	3	弟(いろと)	5			庶妹(ままいも)	6
	兄王(あにみこ)	3	皇(いろと)	1			嬢(をば)	1
		伊呂勢(いろせ)	1			弟(いろと)	3	
				妹(いも)		15		
中 古	兄(せうと)	8	おとうと	5	姉	8	いもうと	6
	せうと	4	弟(おとうと)	3	あね	1	妹(いもうと)	4
	兄(あに)	2						
中 世	兄(あに)	13	弟(おとと)	21	姉	4	妹	8
	せうど	5	おとと	6				
			舎弟	4				
			弟(おとうと)	2				
近 世	兄	13	弟	9	姉	19	妹	25
現 代	兄	25	弟	21	姉	17	妹	15

この表のうち、兄を呼ぶ上古時代の名称「兄」の読み方は、調査対象とした文学作品に指示されていなかったものであるが、同形の文字が、同じ作品中で、「兄<sup>せ</sup>」と読まれ、同じ機能を果たしていることから類推して、やはり「せ」と読んでよいと考えられる。また同じく上古時代の「弟」に関して、「おと」と読んでよいであろう。年上の女のきょうだいに用いられている「姉」は、上古の時代にどんな読み方をしていたであろうか。「姉」の2例はいずれも古事



記上巻に使用されているが、古事記中巻には「此有二女。兄名蠅伊呂泥。中略弟名蠅伊呂杼也。」<sup>(11)</sup>とあり、その部分の頭注には、「考靈紀には〔亦名、絙某姉（ハヘイロネ）〕」とあるところから、また和名類聚抄<sup>(12)</sup>を参照の上から、あねと読んでよい。上古時代の姉、妹欄の両者にまたがっている「妹」は、文脈などででき得る限りの範囲で考察してもその名称が姉を意味するか妹を意味するかわからないので、両者のいずれか、または両方を同時に名ざす名称と理解した。表1. 上古時代にあるいくつかの名称語彙は、兄について「いろせ」は「いろ（同母であることを意味する）」+「せ」であることを考え、「兄」と合計すると、その数は37にのぼり、殆んどすべての数となる。同様に弟も「弟」、「弟王」「弟」、「皇弟」の4つの合計数は21で、それらがいずれも「おと」をもつ。姉については、「あね」をもつものが全部の名称5つのうち3つ、妹では、「伊呂妹」、「妹」、「庶妹」の11が「いも」を共用しその数は大半を占める。また「妹」は年令の差なく姉、妹のいずれもまた両方とも意味していることは指摘した。妹を名ざす名称のうち、「弟比売」及び「弟」に関しては中古の時代にも「おとうと」<sup>(13)</sup>が妹の意味に用いられている例から、「おと」は、かなり長い時代にわたって年少者のきょうだいには男女を問わず用いられていたことが明らかである。即ち、「おと」は、年令の差なく姉、妹を名ざす「いも」を補う役割を果たしているように思われる。これに反し、「弟比売」の「おと」に対立する「兄比売」の「え」は前者に比べて、その使用が少なかったようである。

表 2

	いも		
上古	えひめ △○ せ	△○	おとひめ △○ おと
中古	あね △○ せうと (あに)	△○	いもうと △○ おとうと
中世	△○ あに (せうと)	△○	妹 △○ おとと
近世	姉 △○ 兄	△○	妹 △○ 弟
現代	姉 △○ 兄	△○	妹 △○ 弟

中古時代になると「せ」は兄に限られ、「せうと」（「せひと」の音便形）<sup>(14)</sup>となり「あに」も同時代に用いられたが、その頻度数の割合は、上古時代が、「せ」を含むもの36に対して「あに」3、即ち12:1であり、中古時代は前者12に対し後者2で、6:1、さらに中世にまでくざると、「せうと」5に対し、「兄」13で、逆に「あに」の方が多く用いられるようになった。この事実をきょうだいの他の成員をあらわす名称と、合わせ考えてみたい。これは次のように考察説明されると思う。即ち表2にみられるように、上古時代の「兄比売」に対する「弟比売」の関係が、中古時代においては「あね」が「兄比売」に代り、また上古時代には姉、妹をあらわした類別の名称「いも」の意味が、妹にのみ限定されてくる。この時すでに前述のように「あに」は「せうと」に代る位置に、「

「あね」の対立名称として次第に頻度を増し、やがて中世になると、高頻度で「せうと」に代る。一方、上古においては単に年下を示すにすぎなかった「おと」が「いも」の意味の限定から、これまたその意味が固定され、年下の男性のきょうだいだけを示すようになり、また「あに」「あね」が形の上で「あ」を共用しつつ対立しているように、「おとうと」「いもうと」も形の上で共通なものをわかち合いつつ、互いに対立名称として用いられるようになったと考えられる。即ち上古時代では「いも」及び「せ」が意味対立をなし、語形から言えば同性のきょうだいどうしが互に一つの名称を共用し、或いは「えひめ」と「おとひめ」が「ひめ」を共通なものとして対立し、また中古時代においても「せうと」と「おとうと」が「うと」（「ひと」の音便形）を共通なものとして「せ」と「おと」によって意味対立をなし、語形からいえば、同性のきょうだいどうしが互いに共通なものを分ちあいつ、対立していたのに対し、中世以後では、この関係が異性対立になってきている。これは前述したように「いも」の中古時代における意味の限定固定化が原因すると考えられ、ここに語形の語彙変遷に対する強い関係がみられるように思われる。また、他面、親族名称においては語形が対立関係を常に保ちつつ変遷する原因として、その対立する名称どうしのもつ意味が何らかの点で対立を示しているからと考えられる。例えば上古時代に同性のきょうだいどうしが同一の名称でよばれ、唯「え」「おと」という造語形で、年齢対立を示していたものが、次第に異性のきょうだいどうしの対立「あに」「あね」及び「おとうと」「いもうと」に変化していった事実、また、古くは「をぢ」「をば」が、やがて「おじ」「おば」と音変化<sup>(15)</sup>するに伴ない、「おほぢ」「おほば」が「じい」「ばあ」と、異性対立を失わずに変化していった現象がある。こうした意味の対立は、社会制度としての親族組織を反映すると思われる。<sup>(16)(17)</sup>チベットの母系家族のなかには、現在でも一妻多夫の婚姻制度をもつ民族があり、そこでは、母親の一番年長の配偶者は子供たちにとっては「おおおじ」であり、他の配偶者は「おじ」<sup>(18)</sup>である。自然的親族関係は変わらないのに、その社会制度としての親族組織のちがいがから、親族名称の体系性も異なってくる。

### Ⅲ 結 語

このようにわれわれの広い意味での文化形態が生活上の行動思考の patterns を規制し、それが言語に語彙として反映するとともに、また中世「いもうと」の意味限定固定化に原因するよう思われる語形の語彙変遷に対する強い影響力も、言語を考察するにあたって見逃がせない事実のように思われる。

私は、言語の一面を考察するために、歴史的見地から日本語の親族名称を資料としたのであるが、ここに考察されたものが果して言語現象としてどこまで普遍妥当性をもつものであるかはこれだけの資料では結論できない。私がここに行っているのは方法論的な予備テストの段階であり、さらに資料を広範囲に収集して考察しなければならず、またさらに資料を中世英語、

中代英語に求めて、その言語現象としての普遍性を考察するつもりである。

謝 辞 言語を人類文化の一現象としてとらえ、その本質を極める態度を南山大学Laemmerhirt 先生、調査した日本の古典文学に関しては、愛知県立女子大学渥美かをる先生、尾崎知光先生、服部喜美子先生、資料の言語学的処理については南山大学浅井恵倫先生、名古屋大学佐藤一夫先生、丹羽義信先生はじめ英語学談話会の諸先生方にいろいろと御親切な御指導をいただき、また名古屋大学成瀬小四郎先生からも格別の御教示をいただき、本論文を発表いたすことができましたことをここに深く御礼申し上げます。

#### 註

- (1) Robert J. Smith, Japanese Kinship Terminology ; The Histoty of a Nomenclature, *Ethnology* voll., P349, University of Pittsburgh Press, 1962.
- (2) "A term of refernce is one used to designate a relative in speaknig about him to a third person." George Peter Murdck, *Social Structure*, P.97, Macmillan, New York, 1949.
- (3) 久松潜一；日本文学史、至文堂、東京、昭和32年。
- (4) 調査対象とした書物が予想する読者層の水準に関する予備テスト

#### 1. 調査対象

水準A 朝日新聞 昭和38年5月28日より6月27日まで

水準B 寢室手帖 昭和38年7月号

実話特報 昭和38年6月13日号

〃 〃 20日号

〃 〃 27日号

実話と秘録 〃 6 28日号

実話三面記事 〃 6月25日号

事件実話 昭和38年6月25日号

特集実話 〃 6月27日号

週刊女性 〃 6月19日号

週刊平凡 〃 6月20日号

#### 2. 水準A及び水準Bに該当の週刊誌をとりあげた理由

数種の週刊誌はその内容の分析評価により、

- a 週刊朝日、朝日ジャーナル、サンデー毎日
- b 文芸週刊、週刊新潮、週刊文春
- c 実話と秘録、特集実話、事件実話、実話三面記事

の3種にわけることができる。朝日新聞はこれらのうちのaの週刊誌群と読者層を共通にすると考えられ尙、これら週刊誌が社会問題に関する記事及び論評を内容の中心としているのに対し、新聞は日々の社会事象を報道するのであるから、親族名称に関しての資料がより豊富であると考えた。従って新聞を水準Aとし、水準Bの週刊誌からの親族名称の資料と比較観察することによって目的が達せられると考えたのであ

る。

## 3. 表 調査対象に用いられている親族名称（場Ⅰ）

	親族名称の語彙数			どちらか一方にしか用いられていない親族名称	
	水 準 A	水 準 B	A+B	水 準 A	水 準 B
お っ と	5	5	5		
つ ま	7	6	7	おかみさん	
ふ さい	2	1	2	夫 妻	
こ	5	2	6	長子、末っ子、一人っ子	ベ ビ ー
む す こ	6	2	6	長男、次男、三男、四男	
む す め	9	3	9	息女、王女、養女、三女 お嬢さん、養子娘	
きょうだい	4	2	5	兄妹、姉妹、兄姉	姉 弟
あ に	3	2	3	実 兄	
あ ね	1	1	1		
おとうと	2	2	3	異 父 弟	義 弟
いもうと	1	1	1		
ま ご	2	1	2	孫 娘	
ち ち	6	5	6	男 親	
は は	7	3	7	ママ、母堂、実母、養母	
ふ ぼ	1	1	1		
しゅうとめ	1	2	2		お姑さん
お じ	1	2	3	お じ	叔父、伯父
お ば	3	2	3	お ば	
お い	1	1	1		
め い	1	1	1		
そ ふ	1	1	1		
そ ぼ	2	1	2	おばあちゃん	
そふぼ	1		1		
お や	3	1	3	親、養い親	
む こ	2	1	3	花婿、婿養子	娘 婿
よ め	1	1	2	花 嫁	嫁
いとこ	1	2	3	従 兄 弟	従妹、いとこ
計			89	4 6	

4, 水準A及び水準Bの両者にあらわれる親族名称語彙数は92であり、そのうち43はA及びBに共通であり、その割合は $\frac{43}{88}=48.9\%$ である。さらに、水準Aまたは水準Bのいずれか一方に使われるものを観察比較すると、それぞれ固有の水準をもつものとは考えられず、両水準に用いられる可能性の充分あるものである。

- (5) 日本古典文学大系、第1巻、古事記祝詞、p.339、p.209、岩波書店、東京、昭和33年。
- (6) 日本古典文学大系、第32巻、平家物語下、p.319、岩波書店、東京、昭和35年。
- (7) 日本古典文学大系、第18巻、万葉集5、p.273、岩波書店、東京、昭和38年。
- (8) 池稔、日本語の親族名称と呼称、英語学談話会、昭和40年2月。
- (9) "The criterion of polarity……arises from the sociological fact that it requires two persons to constitute a social relationship."

George Peter Murdock, *Social Structure*, p.104, Macmillan, New York, 1949.

- (10) 日本古典文学大系第32巻、平家物語上、p.237、岩波書店、東京、昭和34年。
- (11) 日本古典文学大系第1巻、古事記祝詞、p.168、岩波書店、東京、昭和33年。
- (12) 正宗敦夫編纂校訂、和名類聚抄、風間書房、東京、昭和37年。
- (13) 日本古典文学大系、第20巻、更級日記土佐日記、かげろふ日記、日記和泉式部日記、p.495、岩波書店、東京、昭和32年。
- (14) 平安朝において音便といわれる音変化がおこった。橋本進吉、国語音韻の研究、p.84、岩波書店、東京、昭和25年。
- (15) 「を」の音が「お」と同音になったのは一般的には院政頃であろうかと思われる。同上、p.83。
- (16) 言語学者 Benjamin Lee Whorf は言語について two cardinal hypotheses ; First that all higher levels of thinking are dependent on language. Second, that the structure of the language one habitually uses influences the manner in which one understands his environment. The picture of the universe shifts from tongue to tongue, を提言し、また、*Science and Linguistics* の中で、次のようにのべている。Natural logic contains two fallacies ; First, it does not see that the phenomena of a language are to its own speakers largely of a background character and so are outside the critical consciousness and control of the speaker who is expounding natural logic. Hence, when anyone, as a natural logician, is talking about reason, logic, and the laws of correct thinking, he is apt to be simply marching in step with purely grammatical facts that have somewhat of a background character in his own language or family of languages but are by no means universal languages and in no sense a common substratum of reason, second, natural logic confuses agreement about subject matter, attained through use of language, with knowledge of the linguistic process by which agreement is attained: i.e., with the province of the despised (and to its notion superfluous) grammarian.

John B. Carroll, *Language, Thought and Reality—Selected Writings of Benjamin Lee Whorf—* p.211, Wiley, New York, 1955.

- (17) また Whorf のこの説とは逆に、高群逸枝は日本婚姻史（至文堂、東京、昭和38年）に上古時代の「

いも「せ」の類別的名称は、族内婚（兄弟姉妹で同時に夫婦である婚姻判度）を意味し、「いろせ」「いろも」は、は実母子族の認識によって禁婚觀念が族内にめばえてきた証拠（p. 18, p. 20）と、言語の存在から、社会組織の存在を説明している。しかし私は、言語と reality 及び社会組織との関係は Whorf や高群氏がのべるように一方的なものではなく、互に影響し合う相互関係と考える。

(18) 南山大学教授沼沢喜市氏による。

## FORM AND MEANINGS IN CONTACT —A TRIAL ON JAPANESE KINSHIP TERMS—

The main object of this paper is to analyze linguistically the relation between a word form and the meaning from the historical point of view. With a view to establishing a method proper for further investigation the author has, in this paper, gone into Japanese kinship terms, the materials of which are available and easy to gather. It has been the author's belief that the context is indispensable in order to tell which member a term really designates and further to see in which situation the term is used. When the context fails, however, to orient us as to the real designation of the term, the genealogy is the only source to decide which member the term stands for. It is Japanese classics that best meet the conditions and the author has found the most useful, reliable materials in the series of Iwanami's *Koten Bungaku Zenshu*.

The investigation has resulted in the following finding:

- 1) The forms and meanings of some of the kinship terms have been gradually changing through the last one thousand two hundred years (from the beginning of the Nara Period up to today), as seen in "imo".
- 2) Some of the changes in meaning seem to have been invited from the interplay of form and meaning. For example, in the Jōko Period "imo" used to designate a sister, either elder or younger, but it gradually came to mean only a younger sister, when the term "ane" was introduced, designating an elder sister. On the other hand, "oto" which used to mean a brother, elder or younger, was limited in use, when "ani" came into use, designating only an elder brother. The process of these shiftings seems to have come to an end when the forms of these terms firmly stood in syllabic and formal contrasts, such as a/ni/-a/ne/, o/to/to/-i/mo/to/. Such linguistic binary as observed seems to have much to do with the kinship system itself.

It is, however, too early to decide here that the result is linguistically universal. This present paper should only be a pre-test with a view to finding proper method for further investigation. The author intends to apply this method to the materials available in Middle and Old English.

### 文 献

Gerge Peter Murdock, *Social Structure*, Macmillan, 1949.

橋本進吉；国語音韻の研究、岩波書店、昭和25年

久松潜一；日本文学史、至文堂、昭和32年。

John B. Canol, *Language, Thought and Reality—Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*—  
Wiley, 1964.

正宗敦夫編；和名類聚抄、風間書房、昭和37年。

Robert J. Smith, *Japanese Kinship Terminology: a History of Nomenclature. Ethnology* vol.1, Univer-  
sity of Pittsburgh Press 1962.

高群逸枝；日本婚姻史、至文堂、昭和38年。